

1 第二次調査結果の要旨

(1) 第一次、第二次調査結果の比較

- ① 静岡分類、悩みや負担の4つの柱で分類すると、2003年の第一次調査に比べ、「心の苦悩」の割合が減り、「診療の悩み」、「身体の苦痛」、「暮らしの負担」の割合が増加しており、調査結果全体と同じ傾向がみられる。
- ② 「心の苦悩」の割合が減少しているのは、医療スタッフの説明、がん相談支援センターの整備、カウンセリングの実施などで、対話が進んだことが一つの要因と考えられる。
- ③ 「診療の悩み」の増加は、状況を把握した上で、治療法の多様化などに伴う自己選択を求められる場面が増加したことなどが要因と考えられる。
- ④ 「身体の苦痛」では、薬物療法の副作用・後遺症に伴う悩みや負担が顕著に増加している。
- ⑤ 「暮らしの負担」では、大きな差異は認められなかった。

(2) 2013年時点におけるがん患者・体験者の悩みや負担の実態

- ① 悩みや負担に関する静岡分類の大分類15項目の中では、「不安などの心の問題」、「症状・副作用・後遺症」、「診断・治療」、「就労・経済的負担」、「家族・周囲の人との関係」が上位を占め、調査全体の結果と類似した特徴がみられる。
- ② 「不安などの心の問題」においては再発への不安が大きい。
- ③ 「症状・副作用・後遺症」の項目では薬物療法の副作用に関する悩みや負担が顕著に増加している。特に、脱毛、末梢神経障害、外見の変化（皮膚・爪の症状）などが増えている。また、手術に関しては、持続する傷痕とその周辺の痛み、しびれ、つっぱり感などが多く、長期化する症状に対する悩みや負担が多い。
- ④ 「診断・治療」では、乳房切除への迷い、乳房再建方法や薬物療法などの選択に悩む事例が多い。
- ⑤ 「経済的負担」では、医療費の負担が大きく、さらに、家のローンや学費など生活費への影響への懸念、脱毛のためのかつらやリンパ浮腫のマッサージなどの保険適用外への費用などが負担となっている。
- ⑥ 「家族・周囲の人との関係」の項目では、家族や子どもにがんのことを伝えるかどうかや伝え方などが悩みや負担となっている。
- ⑦ 治療開始前の気がかりでは、病状や治療に関する項目が上位を占めているが、乳がん体験者では2番目におおかつたの、「外見の変化」で6割の人が選択していた。
- ⑧ 治療開始前に、「治療による日常生活の制限」や「仕事への影響」に関して4割の人が気がかりとしており、日常生活や社会生活への影響に関する懸念も生じている。
- ⑨ 治療中の悩みや負担(困りごと)は、ほぼ半数の人が「治療に伴う症状のつらさ」と「外見の変化」をあげている。
- ⑩ 治療終了後の悩みや負担(困りごと)の第1位は、「治療に伴う症状がいつまで続くか」でほぼ半数の人があげている。

(3) 乳がん患者・体験者の就労について

- ① 離職者の割合は、第一次、第二次調査でほぼ同一であり、現時点では、これまでの就労対策の効果は見られていない。
- ② がんになっても安心して仕事を続けるためには、「各種制度の改善」、「周囲の理解や職場の人の精神的な支え」、「相談窓口」などが望まれている。
- ③ がんと診断された当時の仕事に関する悩みでは、正規雇用者は、仕事を継続することを前提にしたうえでの悩みが上位に入っているが、非正規雇用者の場合は、「仕事を辞めるかどうか」で悩んでいる傾向がある。
- ④ 非正規雇用者の場合、上司や人事労務担当者などの仕事関係者への相談は正規雇用者を下回り、相談しにくい状況にある可能性が考えられる。

(4) 乳がん患者・体験者が求める情報や支援

- ① 乳がん患者・体験者が求める情報や支援を 4 つの柱で分類すると、「心の苦悩」、「診療の悩み」に関することが多く、「暮らしの負担」、「身体の苦痛」が続く。調査結果全体の傾向と同じであった。
- ② すべての要望について上位をみると、「体験談・体験者との交流」、「診療に関する情報入手法」、「経済的負担への対処法」などであった。特に、第 1 位の「体験談・体験者との交流」は、突出している。
- ③ 乳がん体験者が必要と思う情報や支援の上位は、今回の調査全体の結果と類似していたが、「誰かに相談する」、「話を聞いてもらう」ことに関連した 3 項目が、全体の結果より上位にあがっている。同病者との交流を含め、乳がん体験者は、人との交流、気持ちや思いを人に聞いてもらうことを求めている可能性が示唆される。
- ④ 病気や治療の情報収集では、7 割の人が、医師、薬剤師、看護師をあげており、5-6 割の人が書籍・インターネットを情報源としてあげている。